

エッセイ：可愛げのない「酒場女子」のいる風景

～酒場の魅力とモヤモヤと

荒木 菜穂

(甲南女子大学ほか非常勤講師)

はじめに

〇〇女子、〇〇男子、という表現は、基本的には、その分野にその性別が少ないときに使われる表現であると思われる。「イクメン」や「リケジョ」など、制度やメディアまで巻き込んで浸透したこれらの表現にたいしては、「育児するのは母親だけじゃないのになぜ男だけもてはやすのか。そもそもただの『父親』だ」「理系分野で頑張る人に男も女もない」などの批判的な議論がなされたりもする。育児する男性や、理系を志したりそこで活躍したりする女性が応援されてることに変わらないが、諸刃の剣的ロジックではある。

しかしながら、女性はその分野に進出して来たという意味での「〇〇女子」という言葉は、その分野自体の持つジェンダーのしくみを浮き彫りにさせる効果があるように思え、面白い。男性が中心的な文化に女性が参入することは、好意的に受け止められるのか、はたまた排除の憂き目に遭うのか。そこにはどのようなカラクリが潜んでいるのか。

最近気になる話題に「酒場女子」というものがある。例えば、BS-TBSの人気番組「吉田類の酒場放浪記」のスピノフ番組として、2012年より「おんな酒場放浪記」¹が放映され、ドラマ化されたコミック『ワカコ酒』²や、『Hanako』³や『STORY』⁴など女性雑誌が酒場をテーマとしたムックを出すなどの動きも見られる。これらのコンテンツの多くは、酒場を楽しむ女性たちは新たな文化として好意的に扱っている。

酒場、という表現もそうであるが、酒をめぐる文化には、嗜好品としての酒を楽しむ側面と、飲酒を介してのコミュニケーションや場を楽しむという側面がある。企業文化での「飲みニケーション」なども後者の一環ではあると思うが、「酒場女子」からの関心として、本エッセイでは女子が一人ないし複数で楽しむ自主的な娯楽としての飲酒文化に着目したい。「酒場女子」の背景には、いわゆる女性の社会進出、「家」の外の「男性の領域」とされた場への参入と、女性の酒類の消費そのものの増加があると思われる。しかし、嗜好品としても交流の場としても、やはり酒は「男性の文化」である側面が強い。この「男性の文化」への女性の参入について考える時、必ずしも良い面だけではなく、社会における男女のあり方ゆえの問題がそこにも現れている点にも着目していく必要があるのではないだろうか。近年は「女子会」としての飲み会も一般的になってきているが、そういった新たな「場」を作る文化としてではなく、酒場という文化と女子はどのような関係になっているのか、が個人的な関心としてある。これまでの私個人の経験としても、酒場での自分を考えるとき、そこにはやはり女性であるゆえの何かモヤモヤしたものが常について回る感じがすることがある。それは私の被害妄想なのか、この社会の男女、ジェンダーのしくみと関係する何かがあるのか。「男」も「女」も楽しめる酒場の文化を夢想することは可能なのか。本エッセイでは、こういったジェンダーの視点からの女子と酒場の問題をつれづれに考えてみたい。

¹ <http://www.bs-tbs.co.jp/onnasakaba/index.html> 最終アクセス 2018.4.15

² 新久千映『ワカコ酒』①～⑩ (2011年～、ノース・スターズ・ピクチャーズ)

³ 『吉田類・監修 酒場 STORY』(2017年 光文社)

⁴ 『Hanako 特別編集 関西女子酒場』(2013年 マガジンハウス)

1. サービスを「受ける」女性

2018年2月26日付のBusiness Insider Japanの記事に、「スナック女子急増中」というタイトルのものがあった⁵。記事内容は、「スナック女子入門講座」というイベントのレポートを中心に、スナックに通う女性たちが増えてきた、それはなぜか、というものであった。そもそもスナックとは、「もっとも典型的には経営者である『ママ』が一人いて、カウンター越しに接客するような酒と会話を提供する店」であり、多くは「3000円くらいのボトルをキープし毎回のチャージも3000円くらい」「だいたい店でカラオケがある」場のことであるという⁶。古くは遊郭からカフェー、キャバレーなどの流れの中にある、飲酒をともなった社交場の一環であると位置づけられる。本エッセイでは、これら酒を介した社交場の歴史や詳細には深くは触れないが、主に男性の社交場であったことには着目したい。ジェンダー的視点で捉えた場合、そこには、サービスを提供する側、ケア的役割である側の女性と、金銭を支払って、サービスを受け取る側、ケアされる側の男性という役割の非対称性が見てとれる。さらには、（必ずしも酒場の女性が敬意を払われていないわけではないが）「水商売に従事する女性を蔑視しておきながら、しかし現実にはそうした女性が提供する社交性のインフラ」に男性が「ただ乗りする」⁷という構図がそこには存在する。

前述の記事では、女性がスナックを好む理由として、会社や家庭では話せない悩みを聞いてもらったり、普段とは異なる人間関係の中で癒しを求めたりすることが挙げられている。また、記事内のスナックに関するイベントの参加者からの、「全く知らない他人の話を知りたい。普通でそういう人と接点がなく、軽く相談に乗ってくれるところがほしい。」「ママはプロだから。トリマーとしてはプロだから、心のトリミングをしてもらうっていいか」などの言葉が紹介されている。

働く既婚男性の場合、家庭の外での悩みを家庭の中に持ち込む難しさおよび、だからこそ酒場の意義は、かつてより繰り返し語られてきた。仕事関係のつながり（記事では企業内の人間関係の希薄化もスナックの需要の背景として想定されていたが）や家庭外の酒場などが疲れた男性の癒しの場所となった。なぜ家庭内では語りにくいことがあるか。同じ役割経験を持たない妻には話しづらい、男の領域やそこへのプライドなどが邪魔をする、などが理由として考えられる。だからこそ、同じ経験の下にある同僚か、もしくは同じ経験がかえって話しづらい要因になるなら、しがらみのない関係の酒場で「吐き出す」ことが求められたのだろう。そこに、聞き上手で癒しを与えてくれる女性がいれば、なお良い、と。

高度経済成長期にいわゆる男女の性別役割分業が定着してからの女性は、家庭が主な居場所とされてきたが、家庭外への女性の社会進出が進めば、いわゆる男性役割をも引き受けることとなる。それに伴い、仕事や人間関係やそれにともなう悩みも複雑化する⁸。親しい関係の家族が居ても家庭内で悩みを吐き出せず癒しを求められないとする背景には、男性同様同じ経験をしていなくゆえ話題の共有がしにくいことに加え、そもそもの性別役割分業にてケア役割、すなわち「癒す存在」であった女性は、その役割を持たない夫には「癒し」を求めにくい、しかも自分が疲れていても、夫をケアしないといけない、ということがあ

⁵ 木許はるみ「スナック女子急増中—ネットにない『自分をさらけ出せる場所』『ママや良いおじさんは希望』」

[Feb. 26, 2018, 10:30 AM Business Insider Japan] <https://www.businessinsider.jp/post-162677>

最終アクセス 2018.2.28

⁶ 谷口功一「序章 スナック研究事始」谷口功一 スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』（白水社：2017、11）

⁷ 河野有理「〈二次会の思想〉を求めて—「会」の時代における社交の模索」谷口功一 スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』（白水社:2017,165）

⁸ 他方で、近年は、仕事が終わってすぐ家に帰れないなど、男性役割を果たしながら家庭内役割をも求められる男性の持つ悩みも問題化されている。

参考：「WEB特集 “フラリーマン” あなたは夫を許せますか？」

https://www3.nhk.or.jp/news/web_tokushu/2017_1031.html 最終アクセス 2018.4.15

る。記事内の、「部下を育てるには威厳を保たないといけない。家庭では女性、妻と見られ、夫も仕事をしているので、仕事の弱音を吐きにくい」という働く女性の言葉には、それが示されているように感じる。そんな女性が、スナックを癒しの場として求める必然性は十分にあると思われる。

ストレンジャーとのほどほどの距離感、しがらみを忘れ盛り上げられる関係、（主に女性の）サービス提供者による癒し、がスナックの魅力だとするならば、この構図は、程度の違いこそあれ多くの酒場の魅力にも当てはまる。しかし、前述の男性中心主義的社会が求める女性の役割に照らし合わせると、酒場で男性の求める「癒してくれる女性」は、いまだ、従来のジェンダー的ケア役割を担う女性と一致するのではないか。言い方を変えれば、表の世界では女性に「女らしさ」を堂々と求めることができなくなった結果、インフォーマルな酒場という場で、「古き良き」それらがいまだ求められているのではないか。とはいえ、私自身は、酒場を楽しんだり酒場でのコミュニケーションから多くのものを得たりした経験や、記事のような、女子もまた「ママ」による癒しを得たり酒場を楽しんだりすることがあたりまえになってきた状況を知ること、古めかしいジェンダーの構図にとらわれなくてよいと考えられるようになった。

しかしながら、男性文化であった酒場の中には、やはり従来のジェンダー役割を疑わない文化が、そのまま、もしくは形を変え、存続しているように思える経験は、無いものとしては扱えない。以下では、酒場女子の持つ、楽しい面とは違うほうの面、個人的なモヤモヤを思いつくままに書き綴ってみようと思う。

2. 金を払って消費される感覚、価値づけされる自分

私自身は、積極的に飲み歩く日常とは言えない（もともと出不精である上、基本的には人見知りであるから）が、酒場そのものは好きである。私がいわゆる「一人飲み」をするようになったのは、十年少し前、割と最近のこと、ある海外のバンドのライブがきっかけだった。ちょうどSNSが普及し始めたころで、様々なバンドの来日情報などをネット上のコミュニティで共有していた。ある遠方の公演の終演後、誰かと会う約束もなく少し寂しい思いをしていたところ、とあるバーの関係者による、ライブの帰りにぜひ寄ってください、という（宣伝的な意味もあったのだろうけれど）書き込みを目にした。それまで一人でバーなど経験したことがなかったが、思い切って訪れてみた。そのバーは、いわゆる「ロックバー」、すなわちレコードを流し（CDやデジタル音源の店もあるが）、酒を提供する店であった。それまで基本的に自分や友人の家、携帯オーディオ、ライブなど以外に音楽を聴く機会がなかった私は、酒を楽しみながら知らない人と一緒に音楽を聴き、そして語るという場を初めて経験し興奮した。SNSなどで共通の趣味の人と出会い話すことはできても、なかなか私の世代では生身では出会うことの少なかった古い洋楽の話などを楽しめる場を知ったことは、ロック好きとしての自分の人生の中で大きな出会いであったと思う。

そこから、自分の地元や関西、何かの機会で行った時など、音楽（自分の好きな年代やジャンルの）が聴ける酒場を探し、訪れ、聴き語り楽しむという趣味を持つようになった（日頃は決まった店数件を回るぐらいだが）。また、少しして、立ち飲み酒場ブームというものがあり、とある大阪の立ち飲みにも勇気を出して訪れてからは、各地で立ち飲みも楽しむようになった。

バーも立ち飲みも、一人で訪れた場合は一人で楽しむことも可能であるが、しばしば、近くの人との会話に自然と参加する流れになることがある。音楽を聴くバーなどは飾ってあるレコードや流れている曲など共通の話題を見つけやすく、盛り上がりやすい。何度か訪れ顔見知りになると、他愛のない世間話などをアテに皆で飲むのも楽しくなる。しかし、時には不快な会話を経験することもある。例えば、音楽や映画などの話題になると、好きだから話したいだけなのに、しばしば「自分のほうが知識や愛がある」というマウンティングをされる経験をする。また、自分の容姿や生き方をからかわれたり否定されたりする会話は特に苦手である。酒場は本音が出るから、ある程度の嫌なことも経験するだろうし、それを受け流すのが大人だ、という考え方があるのはわかるし、事実そうしてきた。しかし、特に自分が女性であること

に関係する不快な経験については、受け流す自分にたいし、モヤモヤとせざるを得なくなることもある。

私自身は、いくつかのフェミニズム的活動にも関わり、しばしばジェンダーについて話す機会をいただくこともある、いわゆる「フェミニスト」であると思う。「フェミニズム的」には、酒場での私の不快な経験の一部は「セクハラ」となる。私は昔から、外見をよく笑いの種にされたが、酒場での「からかい」は、相手にとっての娯楽になることがある。なぜ「からかい」が娯楽になるのか。セクハラやいじめ全般に言えるのかもしれないが、笑いものにするだけでなく、誰かを見下すことでの優越感やそれによるストレス発散があるのではと思われる。多くの場合、「悪意」はない。言いようによっては、私と楽しく「交流」するための軽い気持ちの「おふざけ」だったと言われるかもしれない。

こういった類の「娯楽」では、私の生き方そのものがネタにされることもある。特にその場かぎりの出会いでは、自分の身の上は曖昧に語ることが多いが、単身であると見なされた場合のからかいは、多くの場合、結婚や女性の性別役割を経験していないことへの見下しとセットになっていた。どんなに「生意気」な女でも、結婚生活（「選ばれる」ことや、ジェンダー化された「大人としての役割」）を経験していない以上、自分のほうが立場的に上である、という思い込みからか鬼の首をとったように説教されることもあった。私に家族があると認識された場合、ちゃんと「主婦」してるのか、「旦那」に愛されていないのではないか、などやたらジャッジしてくる客にもしばしば出会った。どちらの場合も、言わば正月の親戚の集まりのやりとりの娯楽要素を強めたような不愉快な会話である。また、容姿や年齢や役割など、女性としての役割や価値を馬鹿にされる一方、性的なちょっかいを出してきたり隙あれば性的関係を持とうとしたりの客もいた。外見を褒めるのもセクハラ、ということは働く場ではある程度共有されるようにはなったが⁹、こういう酒場の経験がきっかけとなり、私は常々、「女性として褒められるもけなされるのも場合によっては同義」という信念を口にしてしまう。また、こういった「非礼」ほどではないが、しんどさを感じることに、男性客の悩みや自慢話などを聞いたり、相応しい反応をしたりといったケア役割を求められる、ということがある。金を払って酒を飲みに来ているのに、なぜ他の客にサービスをしないといけないのか、と腹立たしい（きちんとした店の場合、さりげなく対応していただけるが）。自主的に飲みに来ているのだから、どういう経験しようとして自己責任ではあるが、私が、女性である故に経験したと思いつているこれらの経験について考えるため、酒文化における女性の立ち位置の歴史に少し目を向けてみたい。

3. 役割から自由になれる場所のはず～女子である私にとっての酒場

阿部によると、日本においては、もともと農業が主要な産業であり、肉体労働の疲れを癒すための濁酒が自宅で作り飲む習慣があった。女性は農業も行いながら家事として濁酒を作っていたが、濁酒は「つくる」のではなく店で買うものとなり、女性が作りつつ酒を「楽しむ」という習慣も少なくなっていた。その代り、女性と酒に関して、「もてなす」という役割が形成されていったという¹⁰。また酒は、「冠婚葬祭をはじめ、農事や家事の節目」に消費されていたが、明治期になり男性の地位が高くなり女性の地位が低下すると、「女性は酒の場から排除され、男性がそれを独占するようになった」という¹¹。また、明治中期になると、「キリスト教や仏教問わず、宗教的立場から禁酒を主張する大衆的な動きや世論が存在」し、女性はさらに酒の場から遠ざけられた¹²。酒からの女性排除の背景には、「供えものを通して、神を強健な酒飲みを典型とするような強い男と同一視」する文化から、酒は成長した男性が嗜むものであり、女子

⁹ 『『キレイ』というのには「働く人間としての彼女の存在を軽視する表現になってしまっているのです」（牟田和恵『部長、その恋愛はセクハラです！』（集英社新書:2013,155）

¹⁰ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,446-7）

¹¹ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,472）

¹² 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,476）

どものものではないという価値観¹³もあった。

こういった酒と女性の関係性は、明治民法やキリスト教的男性中心主義の台頭により強化された家父長制による、男女の権力関係や性別役割分業の明確化の流れの中に位置づけられる。さらに、この時期、花柳界では、芸妓そのものも「お酌」と切り離せない文化である一方、「住む世界が違う」からと、男性同様酒をたしなむことを「誰もが認めていた」¹⁴。このこともまた、家父長制に付随する価値観である、性の二重基準、性的な女性である娼婦と、性的でない女性である妻、という構図が関係している。すなわち、酒を飲み男性とともに楽しむ（楽しまれる）女と、酒を飲まず男性をもてなす女、という構図である。また、明治期の農村部でも、それまでの「青年男女の共飲共食」だった宴の空間が、次第に「男が主体」になり、女は「料理や酌をするように変わっていった」という¹⁵。

大正期には、女性解放を目指す「青鞥」の女性たちが酒盛りを楽しむことなどはあったが、「五色の酒事件」や「吉原登楼事件」などで、それらは「悪評や誹謗中傷的」¹⁶にされた。また、大正から昭和にかけてのカフェ文化は、芸妓や娼妓といった「玄人の女」と、そうではない「素人の女」との境目をあいまいにしたという。女性によってカフェの女給は前借などで雇い主の「隷属的存在」となる芸妓や娼妓、酌婦と比べ自活のため「手っ取り早く稼げる」職業であった¹⁷。「男性客からのチップをより多くもらうため」の「営業戦略としての色仕掛け」¹⁸などの性的サービスが伴うこともあったが、女給は、いわゆる花柳界の「玄人」ではないが、「素人」女性には許されない酒を「否応なしに初体験」する¹⁹存在であったという。カフェや女給の存在は、酒をめぐる「素人」「玄人」女性の分断に影響を与えた²⁰。

女性を酒や酒場から排除する一方で「もてなし」の役割を担わせる文化、また、酒をたしなみ男性を性的に楽しませる「玄人」女性と、飲酒から遠ざけられる「素人」女性とを分断する（もしくはその分断を曖昧にすることを楽しむ）文化の影響は、戦後の女性の社会進出などで大いに変化したが、それでも高度経済成長期には飲酒する女性への差別がまだ残っていた²¹。女性が酒を楽しみ、酒場へ出入りすることも珍しくなくなり、何十年を経て現在の酒場女子ブームとなるが、この、明治期以来の酒と女性と男性の役割や規範は、やはり現在の酒をめぐる文化にも色を残しているのではないか。男性が楽しい気分になるよう（客でありながらも）もてなす役割、その延長線上に、（女性にとって不快な）からかいという娯楽に反発せず「空気を読んだ」受け答えをする「気遣い」、また、セクハラにも反発せず笑ってかわすなど、性の対象として消費される役割が求められているよう感じるところがある。

フェミニズムでは男性にのみ性的自由が認められるという社会の二重基準として、貞節を守る「家庭の女性」と性の対象となる「娼婦」と、その女性の立場間の分断が指摘されてきたが、先述のカフェでの「玄人」と「素人」の基準の曖昧さのように、家事育児でへとへとでも美しい外見やセクシーさが妻に求められるなど、現代社会ではこういった二重の役割両方が（さらには男性役割までが）女性に求められる

¹³ 竹井恵美子「食にあらわれるジェンダー」竹井恵美子編『食とジェンダー』（ドメス出版:2000,211）

¹⁴ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,486）

¹⁵ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,488）

¹⁶ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,510）

¹⁷ 馬場伸彦「カフェと女給」『女子学研究』vol.2(女子学研究会:2012,106)

¹⁸ 井田太郎「カフェからスナックへ」谷口功一・スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』（白水社:2017,139）

¹⁹ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,519）

²⁰ 1960年代に出現したスナックの文化もまた、「都市部にあっては」「戦前のカフェにあった文化的側面を残す場として機能していた」という（井田太郎「カフェからスナックへ」谷口功一・スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』（白水社:2017,143））。

²¹ 阿部健『どぶろくと女—日本女性飲酒考』（新宿書房:2009,551）

流れにある。その結果、男性を楽しませるために「性的であれ」、というメッセージと、「性的であるな」、あるいは、こんなところで飲んでないでちゃんと旦那のために尽くせ、などの「家庭的であれ」、というメッセージ、という矛盾するメッセージが、女性に向けて発せられるのではないか。酒場女子が、歓迎される向きもある一方、いまだに眉を顰める層もいることもまた、同じ性の規範の延長線上にある。女子が本当の意味で、主体的に酒場を楽しめるようになるには、この規範が解消され、「都合のいい」女性、不快に反発せず「かわいげ」がある女性でなくとも、男性客と対等に尊重されることが、必然である。

おわりに～酒場の魅力アップデートのために

上野千鶴子は、女性たちが趣味や社会活動など「ココロザシやタノシミが一致する契機をつうじて成立する、選択性の高い少人数の対面集団」を「女縁」として評価する²²。「女縁」とはジェンダー役割のような「過社会化された役割」から「離脱」することが可能な「自由で開放的」な「選択縁」である²³という。いわゆる酒場での「女子会」は、「女縁」的なものを形成することができる意味で、性役割から自由である可能性は高い。また、酒場というものは、男女問わず、仕事や家庭の事を一時的に忘れて匿名で楽しめる場、こういった「過社会化された役割」から解放され自由になれる場である側面もあり、その意味で女性が酒場を楽しむ意義や可能性は十分にある。

しかし、酒場が、いまだ従来のジェンダー的価値観を内包したものである現実はそのまましていいわけではない。女性にとっても、男性にとっても、お互いを尊敬し、良い関係を作れない場合は、いくら目先の楽しさがあっても、貧しい。もし、伝統的な役割や文化を否定することが、いちいち「めんどくさい」、「せちがらい」ことという意識が酒場の男女に残っているのならば、酒場は貧しい文化である。

自分自身の経験も含め、特に女性の視点からの（男性であっても独身男性へのからかい、またLGBTへのからかいなども想定される）酒場の「もやもや」を綴ったが、上記のような、解放の心地よさや、女性として対等に会話や関係を楽しめる経験も多々あるゆえ、私は酒場を楽しむことが出来ている。また、先述の「スナック女子」のような、もてなしや気遣いの役割を担うのではなく、「もてなされる」「癒される」女性も現れつつある。あらゆるセクシュアリティが気持ちよく楽しめるようになることを望むことは、そんなに非現実なことではないのかもしれない。

【参考文献】

- 阿部 健、2009、『どぶろくと女—日本女性飲酒考』 新宿書房
馬場伸彦、2012、「カフェと女給」『女子学研究』vol.2 女子学研究会、2012、91-113
井田太郎、2017、「カフェからスナックへ」谷口功一・スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』白水社、129-146
河野有理、2017、「〈二次会の思想〉を求めて—「会」の時代における社交の模索」谷口功一・スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』白水社、147-168
竹井恵美子、2000、「食にあらわれるジェンダー」竹井恵美子編『食とジェンダー』ドメス出版、203-228
谷口功一、2017、「序章 スナック研究事始」谷口功一・スナック研究会編著『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』白水社、7-22
牟田和恵、2013、『部長、その恋愛はセクハラです！』集英社新書
上野千鶴子、2008、『「女縁」を生きた女たち』,岩波書店.

²² 上野千鶴子『「女縁」を生きた女たち』（岩波書店:2008,58）

²³ 上野千鶴子『「女縁」を生きた女たち』（岩波書店:2008,285）